

『アイルランド状況管見』はどう読まれてきたか

—— ウェアから集注版まで

水 野 眞 理

はじめに

本稿は、スペンサー（Edmund Spenser 1552-99）の『アイルランド状況管見』（*A View of the State of Ireland* 本稿では『管見』と略す）の受容史の一部をなすものである。この百年間における『管見』の受容の歴史を一言で総括するなら、スペンサー作品の中でマージナルあるいは「その他」と見なす傾向から、むしろ中心的なテキストとして見る見方への変化、と言えるだろう。この変化の背景には、これまで蓄積された批評的視点の変化がある。とりわけ、20世紀の終わりごろから盛んになったニュー・ヒストリシズムは従来の「流麗な英詩の書き手」から、「アイルランド植民地化のプロセスに直接関与し、またそこから創作上のインスピレーションの多くを得た書き手」へとスペンサー観を大きく変えた。我々は、20世紀、21世紀の英文学の世界に身をおいてそこから『管見』を見ているのである。

本稿は2016年5月29日、日本スペンサー協会 2016年度総会において発表した内容に加筆訂正をおこなったものである。

しかし、『管見』の読み方の変化は20世紀になる以前にも起きていた。『管見』は初版以来400年近くにわたって何度も出版されてきたが、その間、本書はどのように読まれてきたのであろうか。

本稿では批評史全体を見渡すことは叶わないが、『管見』が出版されるごとに付された、編集者による序文、スペンサーの伝記などを中心的な材料とし、ゴットフリード (Rudolf Gottfried) 編の集注版 (Variorum Edition) 第10巻『散文集』 (*Prose Works*) に収められた General Criticism および、メイリー (Willy Maley) による『管見』受容の研究を参照する。伝記に注目する理由は、19世紀までの詩人の作品集の冒頭にはたいていその詩人の Life と称するものが付されており、伝記と称していても、実は作品集に対するイントロダクションの位置を占めることが少なくないからである。伝記の書き手は必ずしも編者自身とは限らず、編者が変わっても同じ以前の版の伝記が流用されたり、一部を改訂しただけでリサイクルされたりすることもしばしばであった。

本稿ではニュー・ヒストリシズムへの敬意を忘れるつもりはないが、あえて、ニュー・ヒストリシズム的でない姿勢でもって、17世紀から20世紀前半の人々が『管見』をどのようにとらえてきたかを再構築しようと試みる。

I 1633年以前の手稿回覧

『管見』の出版はスペンサーの没後34年後のことであり、スペンサーの生前・死後を通じ、出版前には手稿の形で回覧されていた。Variorum Edition によれば少なくとも15、ビール (Beal) 編 *Index of English Literary Manuscripts* によれば10、プリンク (Brink) によれば21、ファウラー (Fowler) によれば22の手稿が現存する¹。

1 手稿および版本については "Appendix III C The Text", Gottfried, ed. *The Prose Works, The Works of Edmund Spenser*, Vol. 10, 506-24 を見よ。

これらにおいては本書は1596年に書かれたとされ、1598年に書籍出版組合 (Stationer's Company) に渡った記録はあるものの、実際に出版されることはなかった。手稿での本書のタイトルは『アイルランド現状管見』 *A View of the Present State of Ireland* であり、スペンサーにとっても、また初期の回覧読者にとっても、その内容が現代である (“Present”) 1590年代のアイルランド事情であったことがうかがわれる。

II 1633年『管見』初版以降の反応と評価

『管見』の初版は1633年、アイルランドの好古家 ウェア (James Ware 1594–1666) が編集、出版したものである。*Spenser Archive: Finding Aid* というインターネット上のサイトによれば、世界で44冊の所在が確認されている²。

ウェアは本書を他の二冊のアイルランド史とまとめて『アイルランド史』 *The History of Ireland* というタイトルのもとに出版した。この版における本書のタイトルは『アイルランド状況管見』 (*A View of the State of Ireland*) であり、スペンサーの死後34年を経て、もはや本書が時事性を失っていたことがうかがい知られる。ウェアにとっての『管見』は、アイルランド人の起源や、イングリランド人との関係の歴史を概観する書物であった。この初版の特徴は、ウェアによる好古家らしい注、誤りの訂正、省略、書き換えが多く、本来の形とは言いがたいことである。それらの書き換えにおけるウェアの意図は「序文」において次のように説明されている。

ここに出版する彼の作品に関して……それは彼の学識と深い判断力の十分な証左ではあるが、ところどころもう少し節度を持って穏健に書かれてあれば、と願う。彼が本稿を書いた時代の問題や不幸を考えれば、彼の過激さも幾分無理からぬところ

2 1971年にDa Capo PressからThe English Experienceシリーズの一冊としてファクシミリ版が出たので、我々は手に取ることができるようになった。

であろう。もし彼が長生きして今という時代を、またこの30年間の平和がこの島にもたらした遵法精神と商業、農業、秩序、そして学問へのよい影響を見たならば、彼もいくつかの特定の家系に対する悪口、あるいはアイルランド人全体に対する悪口を述べていると見えるような箇所をきつと削除したことであろう。

王党派である編集者ウェアによってさえも、本書は過激な発言と、アイルランド人に対する偏見を含む問題あるテキストと見なされている。そのことは、出版後まもなく、批評となって現れている。ウェアの版がダブリンで出版されたことから、早い時期の反応は、アイルランドから現れた。

メイリーは、『管見』に対する最も早い文字化された反応として、アイルランドのカトリック法律家ベリングズ (Richard Bellings 1613-77) が1635年頃に出したコメントを上げている。これは手稿の形で存在していたものを、19世紀末にギルバート (John Gilbert) が『アイルランド・カトリック同盟の歴史および1641-49年のアイルランドの戦争』(*History of the Irish Confederation and the War in Ireland 1641-49*, 1882) に掲載したものである。カトリック同盟の書記であったベリングズはスペンサーを「アイルランドに悪意を抱く者」、本書を「この王国の完全転覆を目指して立てられた破壊的な計画」、そしてその内容を「植民、立ち退き、強制移住、哀れなアイルランド先住民の分散と散住によって、アイルランド人と彼らの祖国を徹底的に破壊するための…罪深い計画」と強く非難している。

ここで触れられている立ち退き (Displantation)、強制移住 (Transplantation) については説明が必要であろう。イングランド政府はしばしば、戦争を遂行するための出費を借入し、戦後にそれを返還したり、兵士への未払いの給料を清算するため、強権を発動して土地を収用してきた³。アイル

3 帝政ローマにおいても同様のことが行われたことは、ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro 70-19BC) の『牧歌』(*The Eclogues*) 第1番、第9番における言及からも知られる。

ランドにおいては、九年戦争と呼ばれるイングランド政府とアイルランド土着勢力の間の闘争において、戦争の費用の事後調達および、先住のアイルランド人の勢力弱体化を目的として、東部から西部への強制移住が用いられた。スペンサーも『管見』の後半でこの手段を提案しており、それをベリングズは非難しているのである。

次に、清教徒革命後、『管見』がどのように捉えられていたかを示すエピソードを紹介したい。まずその背景としておさえて置くべきは1641年のカトリック武装蜂起である。アイルランド北部のアルスターで、イングランドの支配に反抗するカトリック住民によって、プロテスタント住民（その殆どはイングランドからの移住者）が多数殺された。その後、英国議会は清教徒革命と呼ばれる運動の中で1649年に国王チャールズ1世（Charles I）を死刑に処し、クロムウェル（Oliver Cromwell 1599-1658）を護国卿（Lord Protector）の地位においた。クロムウェルは1641年のアルスター武装蜂起でカトリック勢力に殺されたプロテスタントの復讐を誓い、1649年ピューリタンの軍を率いてダブリンに上陸し、多数のカトリック住民を殺戮する。反乱の首謀者は処刑、3万人以上の加担者は大陸への逃亡を余儀なくされたが、彼らの土地は没収されてイングランド政府のものとされた。また無罪となった人々も、上述したと同様な政策によって、アイルランド西部、コナハトと呼ばれるシャノン河の西

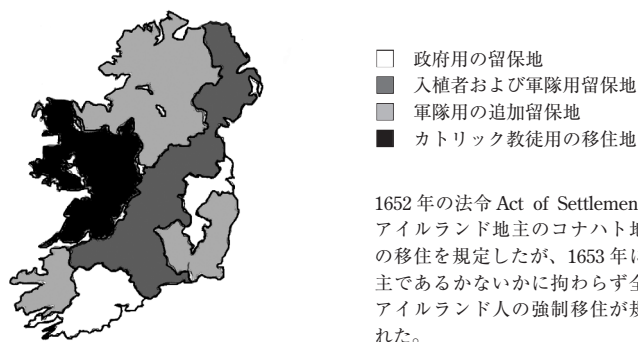


図1 1652-53年の土地収用

側のやせた土地（クレア・ゴールウェイ・メイヨー）へと強制移住させられた。こうして空いた土地はいったんイングランド政府の財産とされた後、政府の債権者（軍の費用を融資した人々と将校・兵士）に支払われた。図1は1652年、53年のイングランド政府による土地収用を図示したものである。

強制移住の被害を受けたアイルランド人は、先住のゲール系住民だけではなく、カトリック教徒であれば、イングランド系の者もそうであった。このような強制移住の対象となった一人が、エドマンド・スペンサーの孫ウィリアム・スペンサーである。彼はエドマンドの代からスペンサー家に与えられていたアイルランド南部コーク州（図1の白色の部分）のキルコールマン城（Kilcolman Castle）に住んでいたが、その土地はイングランド議会軍に供用されることになり、コナハトへの強制移住を命じられていた。1657年彼はクロムウェルに請願書を書いて、その免除を願っている。その請願書においてウィリアム・スペンサーは、自分の代でカトリックからプロテスタントに改宗したこと、および、「祖父エドマンドはアイルランド住民を文明化しようとして書いた書物によってアイルランド住民の恨みを買ったので、孫の自分もコナハトへ移住することは危険」という二つの理由を挙げている。クロムウェルはウィリアム・スペンサーの請願を受け入れようとしたが、ダブリン政府は決定を変えなかった。しかし、実際スペンサーが明け渡す財産に見合うだけの土地はコナハトにはなかったため、クロムウェルは自らの甥で軍人のデズボロ（John Desborough）がシャノン河を越えたところのパリナスロウに与えられていた土地をウィリアム・スペンサーに与えることにした、とされる。デズボロ自身もまた別の土地を与えられている。（Cunningham 104）

このエピソードは、『管見』が早くからアイルランド住民の怒りを買う内容であると認識されていたことを物語っている。また、クロムウェルがスペンサーに特別な敬意を払っていたことも窺い知れる。

クロムウェルに触れた以上は、ミルトン（John Milton 1608-74）の『管見』

理解に触れないでは済まされないだろう。ミルトンが1642年から44年ごろ、すなわちカトリックの武装蜂起の直後に『管見』を読んだことは、パーカー他による『備忘録』(*Commonplace Book*)の分析から判明している⁴。ミルトンの理解では、『管見』はウェアの意図した歴史書ではなく、完全に実用的な統治の方策の書であった。そのことは、『備忘録』の中の「軍隊の訓練について」(*De disciplina militari*)と題する項目の中で「戦後の兵士への糧食を考えておくこと。スペンサーのアイルランド対談 84 ページ等」と書きこんでいることから察せられる。『管見』においてスペンサーは、九年戦争後も安定的にイングランドが支配を続けるために駐屯軍 (*garrison*) をアイルランド各地に残すこと、その食料供給のために本来牧畜国であったアイルランドに農業を推進することを提案しているが、ミルトンが1641年の蜂起の直後にこれらの点に注目していたということは、共和国政府の外国語秘書官に任命されて『アイルランドの叛徒と交された和平条項、オーモンドよりジョーンズ大佐への書簡、およびベルファストの長老会の陳述についての見解』(1649)を書く何年も前から、彼がアイルランド支配に関心を抱いていたことを示している。

アイルランド人からの反発は、さらに、スペンサーの歴史認識の不正確さにも矛先を向けた。その一例は、ゲール系住民であり彼自身クロムウェルの土地収用の犠牲者でもあった歴史家オフラハティ (Roderic O'Flaherty 1629–1718?) によるラテン語の著作『オウジギア』(*Ogygia: seu, Rerum Hibernicarum chronologia* 1685) である (図2)。オウジギア (オーギュギー) はホメロスの『オデュッセイアー』において主人公オデュッセウスを引き止める女神カリュプソの地上楽園的な島であり、オフラハティはアイルランドが本来はそのような心地よい場所であるはずだという信念に基づいてこの著作を書いたと考えられる。これをヒーリー (James Hely) が約100年後の1793年に英訳して2巻本として出版している (図3) のでそちらを見てみよう。

4 Parker and Shawcross 46, Maley 193–96.

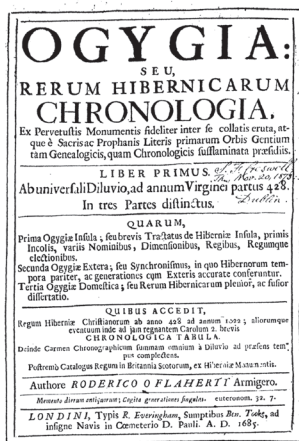


図2 『オウジギア』初版(1685)扉

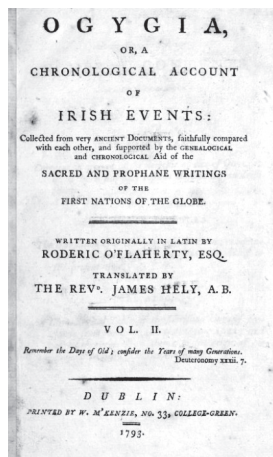


図3 『オウジギア』英訳版(1793)扉

第3部第77章「エドモンド・スペンサー氏の誤り」の冒頭でオフラハティはウェアとカムデン (William Camden) を引きながら「彼は生前その時代随一の英詩人であり (ウェア)、限りなき才能と汲めども尽きせぬ豊かな詩才をもってチョーサーに告ぐ地位を与えられていた (カムデン)」としながらも、『管見』におけるスペンサーの歴史的認識の誤りを指摘せずにはいない。「オールド・イングリッシュの一部は、イングランド人でありながら、ゲール化して家名もアイルランド風に変えてしまっている」という『管見』の登場人物アイリニーアスの発言について、それらの家柄は生粋のアイルランド土着のもの、と指摘し、また、イングランドの法体系がノルマン・コンクエストを行ったウィリアム (William the Conqueror) によってもたらされたもの、としたり、クラランス侯に関する取り違えを犯したり、といったイングランド中世史に関するスペンサーの誤りが取り上げられ、スペンサーは歴史家としては子供扱いされている。

1580年にエリザベス女王治世下でアイルランド総督を務めたアーサー・グレイ卿の秘書エドモンド・スペンサー氏は剽窃の謗りを免れない。彼はアイルランドの状況に関するユードクサスとアイリニーアスの対話において、アイルランド人の起源の多様性、儀式、法、道徳、宗教について述べ、政治的改革を提案している中で、次の家系——マクマホン家、シヒー家……——がイングランド起源だと述べているが……彼は未熟者で自国〔イングランド〕の歴史にも全く暗いようだ。……この詩人の国内事情に関する知識は称賛せざるを得ないが、政治家として歴史についてはまったくの子供であることには驚嘆を禁じえない！キケロは過去の歴史的事象に暗い者を子供に譬えているが、むべなるかな。(284-88)

興味深いことに、1727-28年、ダブリンでスウィフト (Jonathan Swift 1667-1745) が匿名の『アイルランドの状況短観』(*A Short View of the State of Ireland* 図4) というパンフレットを出版している。タイトルから見て明らかにスペンサーの『管見』を意識しているが、対話体でなく一人称の語り手によるもので、その内容はイングランドのアイルランド支配に対する強烈な批判である。直接にはこのパンフレットの直前、ブラウン (John Browne) が『交易に関する時宜を得たコメント』(*Seasonable Remarks on Trade*) においてアイルランドを豊かな土地、イングランドにとっての富の源泉として描いたことが契機となっており、『管見』に対する明確な言及はない。しかしその最終段落は次のようになっている、『管見』の冒頭部のイングランド人ユードクサスの疑問「もしアイルランドという土地がそれほど美しくて豊かな土地ならば、どうしてそこを活用して、その野蛮な住民をもっと御しやすく大人しくさせる方策がとられないのか不思議に思う」を念頭において、ブラウンとユードクサスを重ね合わせて皮肉な目を向けていることが見て取れる。

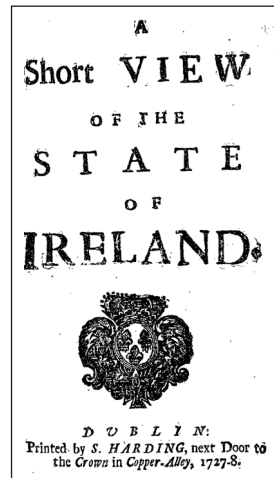


図4 『アイルランドの状況短観』
(1727-28)

結論。もしアイルランドが豊かで栄えた王国であるというなら、その富と繁栄には、未だ人類からは隠されている何かの原因があるはずであり、その結果もまた同様に見えないのだ。外国人がやってきてこのような矛盾を持ち出すなら、それは驚くには当たらない。が、この王国に生まれつき、ここに暮らしている人間が同じ見解を持ち出すなら、それは無知を通り越して馬鹿であるか、あらゆる名誉、良心、真実をかなぐりすてた〔イングランド人への〕ゴマすり野郎だというほかはない。(15)

III イングランドにおけるウェア版の再版

イングランドにおいては、ウェアによる初版はその後何度も底本として用いられ、スペンサー作品全集の一部をなすことになる。その流れを見ていくと、スペンサーの詩人としての地位の確立とともに『管見』自体への注目度が下り、アイルランドの読者にとっての切実な意味や感情は忘れられ、歴史的な不備だけが指摘されるようになったこと、そして19世紀にいたってようやく、学術的な手続きによるテキストの確立が行われたことが見て取れる。

1679年版全集 *The Works of the Famous English Poet, Mr. Edmond Spenser*. 編者不明の一卷本(図5)。『管見』を『アイルランド史』(*The History of Ireland*)と題している。テキストはウェア版に拠っているが、ウェアの注は削除されている。当時はスペンサー作とされたフレッチャー(Phineas Fletcher 1582-1650)の『ブリテンのアイダ溪谷』(*Britain's Ida*)および、『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender*)のバサースト(Theodore Bathurst 1587-1652)によるラテン語訳 *Calendarium Pastorale* も含み、スペンサーの短い伝記(作者不明)を冒頭に載せているが、『管見』に関するコメントは含まれていない。

1715年版全集 *The Works of Mr. Edmund Spenser in Six Volumes*. 詩人ヒューズ(John Hughes 1677-1720)の編集になる六巻本(図6)。ウェア版を底本と

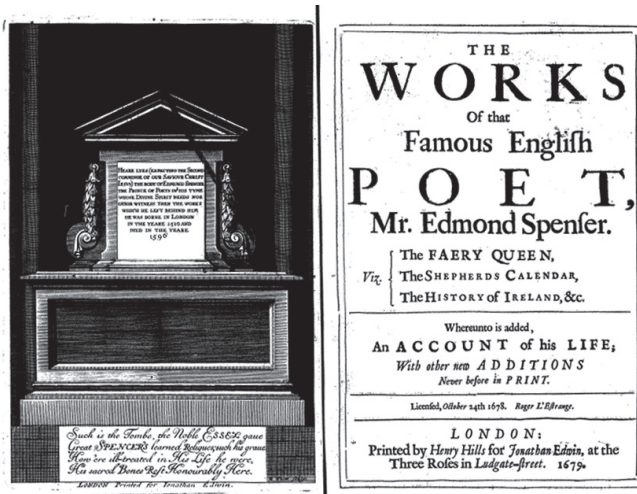


図5 1679年版全集の扉 左はスペンサーの墓誌

する『管見』はその第6巻に、1679年版から踏襲したフレッチャー作『ブリテンのアイダ溪谷』（Hughes自身は疑念を呈している）と『羊飼いの暦』のバサーストのラテン語訳などとともに雑文（Miscellaneous）的に掲載されているが、ウェアの付した序文や注は削除されている。詩人であったヒューズにとって、『管見』は価値の低いものであったのだろう。スペンサーは詩人としてののみ意味があり、その故にヒューズは「寓意詩論」、「『妖精の女王』批評」、「『羊飼いの暦』批評」、「スペンサー作品における古語、難解語辞典」をつけ、スペンサーの伝記も1679年版のそれを大幅に増補しながら、『管見』の内容に関わる発言は皆無なのである。

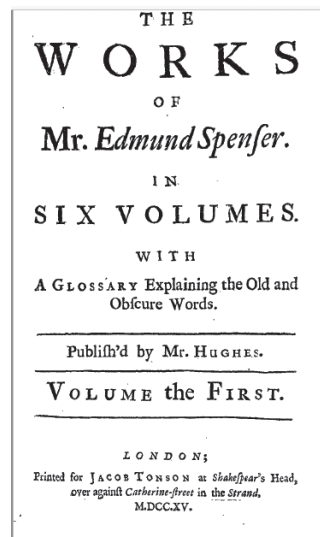


図6 1715年版 全集扉

1750 年版全集 *The Works of Spenser, in Six Volumes*. ヒューズが 1715 年に編集した版がヒューズの死後再版されたもの。ヒューズによる伝記をさらに増補した伝記（編者不明）は『管見』に次のように触れているが、ここでも内容に関するコメントは見られない。

その「アイルランドの状況についての談話」に示されるように、彼が任務を優れた技能と能力で遂行したことは疑いをいれない。そこには堅実で思慮に富む発言が多く見られ、スペンサーは詩の芸に劣らず国家運営にもじゅうぶん資格ありということがわかる。(I, viii)

1751 年版 絵入り『妖精の女王』*The Faerie Queene* に付された新しい伝記の中で、歴史家バーチ (Thomas Birch 1705-66) は、ヒューズの見解を踏襲した称賛のに続けてジェイムズ・ウェアによる高評価を引用した上で、ウェアの著作集の英訳版を編集したオフラハティによる厳しい批判を引用して締めくくっている。

…… [オフラハティによれば] アイルランドの歴史と古い事蹟に関して彼はしばしば、ひどく誤っており、歴史家に要求される判断力と忠実さよりは詩人の空想と自由に流されているように見えるし、その上、彼は穏健さを欠いている、という。もしこれが本当なら、我々は『管見』の最後で約束されているアイルランド古代史が書かれなかったことも惜しむ理由はないだろう。(I, xxv-xxvi)

1763 年版『アイルランドの状況管見』*A View of the State of Ireland*. 史上初の『管見』の単独出版である (図 7)。底本はヒューズの用いたウェアの初版であるため、ウェアの

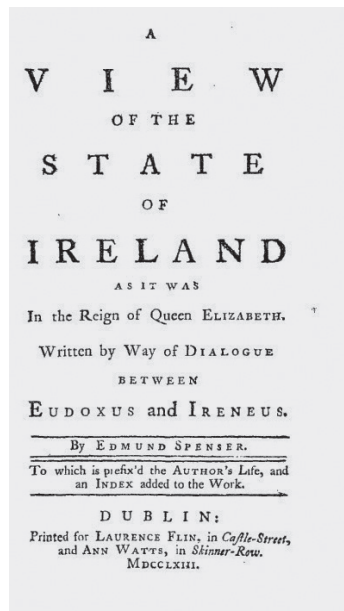


図 7 1763 年版『管見』扉

序文と注は削除されている。新たに固有名詞を中心とした索引を付している。世界で 30 冊の所在が確認されている。

IV トッドによる校訂

1805 年、聖職者兼書誌学者であったトッド (Henry John Todd 1763-1845) の編集にかかる八巻本の全集 *The Works of Edmund Spenser in Eight Volumes with the Principal Illustrations of Various Commentators* が出版される (図 8)。『管見』はこの中の第 8 巻の 297-512 ページに収められた。トッドはこれ以前にミルトンの『コーマス』(*Comus: a mask, by John Milton. Presented at Ludlow Castle, 1634 ...*) および『詩集』(*The Poetical Works of John Milton*) の編集をおこなっており、スペンサー作品の編集もその延長上にあったと見るができる。この版の最大の特徴は、ウェアの版によって流通していた従来の『管見』に加えて、4 種の手稿 (E, C, L, D1) を参照したことであり、ここで初めて、スペンサーの作品は好古家の対象から学術の対象となったといえる。トッドはウェアの注の一部を残しつつも、自らの注も付している。

トッド編の版の冒頭にも先行文献を駆使した 52 ページにわたるスペンサーの伝記が付されている。トッドはバーチの伝記に従い、『管見』に対するウェアの高評価を引用したのち、オフラハティの酷評も載せている。また、複数の手稿に見られる、ウェアによって省略されたスペンサーの過激な発言に関しては、「あえて詳述するには及ばないと判断した」として、おおむねウェアの版に拠ってい

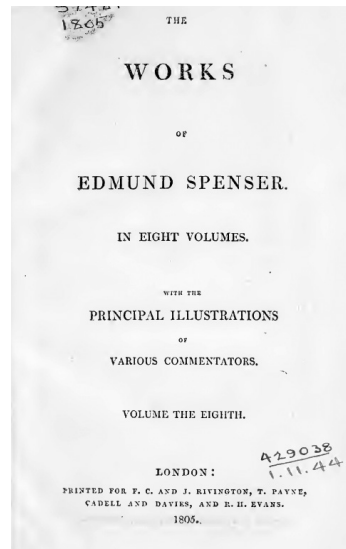


図 8 1805 年版 全集扉

ることが示される。

1845年にはトッドによる全集が一巻本 *The Works of Edmund Spenser with a Selection of Notes from Various Commentators: and a Glossarial Index* として出版され、その後テニスン（Alfred Tennyson 1802-1899）に献じられた 1850 年、1852 年、1856 年、1859 年、1861 年、1869 年、1872 年、と何度も再版されている。19 世紀後半においてはトッドの全集がスペンサー作品の標準テキストであったと見ることができよう。

以下、トッド以外の編集者がウェア版に拠って『管見』を出版した事例を下に挙げておく。

1809 年版 *The Works of Spencer, Campion, Hanmer, and Marleburrough*. ウェア版の再版になる二巻本。Ancient Irish Histories シリーズの一冊として出版されたもので、内容はウェア版を踏襲している。しかし、ウェア版の活字をモダンナイズする際の誤読やミスタイプも目立つ。1994 年にハドフィールドとメイリーが出版したテキストはこの 1809 年版に基づくので、注意が必要である。

1862 年版全集 *The Works of Edmund Spenser*. シェイクスピアの不誠実な編集者として有名なコリアー（John Payne Collier 1789-1883）の編集による五巻本。第 1 巻に付された長文のスペンサーの伝記において、コリアーは『管見』がスペンサーの生前に出版されなかった理由を、その強圧的な内容のためにカトリック勢力から嫌われたことは言うまでもなく、プロテスタント勢力からも受け容れられず、出版されれば自らの身を危うくしかねないと考えたスペンサー自身が出版を差し止めたのでは、と推測している。

1890 年 ロンドン大学名誉教授モーリー（Henry Morley 1822-94）編集による三人のイングランド人によるアイルランド論集『エリザベスおよびジェームズ 1 世治下のアイルランド』（*Ireland under Elizabeth and James I* 図 9）。スペンサーの『管見』、デイヴィズ（Sir John Davies 1569-1626）の『アイルランド征服が不完全に終わった真の理由の解明』（*A Discoverie of the True Causes*

Why Ireland was Never Entirely Subdued 1632) その他のアイルランド文書に、モリスン (Fynes Moryson 1566-1630) の『旅行記』(*Itinerary* 1600) からアイルランド関連の部分を含ませたもの。ほぼ同時代のアイルランド論を並列して見せるという着想は、これまでにはなかったものである。

モーリーの姿勢は客観的である。彼はそのイントロダクションにおいて、スペンサーがアイルランドでの長年の滞在によってその状態を記述しながら、征服という「大問題の核心に迫っている」(get at the heart of a great question) と述べ、九年戦争時の人肉嗜食を含む凄惨な光景をスペンサーとモリスンが共通して観察していることを指摘している。(12-13)

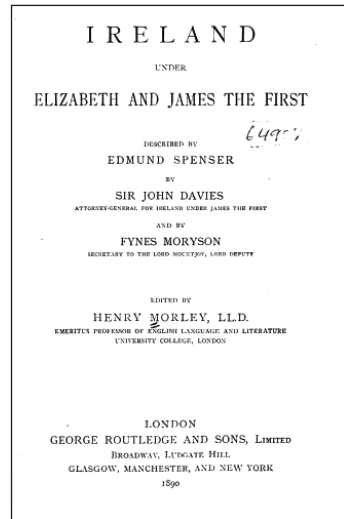


図9 『エリザベスおよびジェイムズ1世治下のアイルランド』扉

V 手稿からの本文校訂版

1869年版全集 *Complete Works of Edmund Spenser Edited from the Original Editions and Manuscripts* は聖職者兼文学作品校訂者モリス (Richard Morris 1827-99) の編集によるもので (図10)、『管見』に関しては手稿A, H1, H2にウェアの版を校合している。モリスはその序文において、ウェア版の不備を感知し、初めて本格的に手稿からの編集を行った旨を宣言している。

ジェイムズ・ウェア卿によって出版され、その後の版の底本となってきた散文のアイルランド論は、精査してみると非常に不正確で不完全なものであることがわかった。この単独の散文作品をこのような不完全な状態に放置しておくのは、スベ

ンサーに対して正当さを欠くように思われる。それゆえ私は大英博物館の図書室に所蔵される三篇の手稿から編集をやり直した。本文は三篇のうちの最古のものである追加手稿 (Additional Manuscript) 22022 に基づいている。ジェイムズ・ウェア卿が見た中では最良の手稿について述べていることによれば、この追加手稿は明らかに優れたものである。その省略部分に至るまでウェアの本文に酷似しているハーリー手稿 1932 とハーリー手稿 7388 とは清書された手稿であり、追加手稿、ウェアのテキストと校合されたものである。

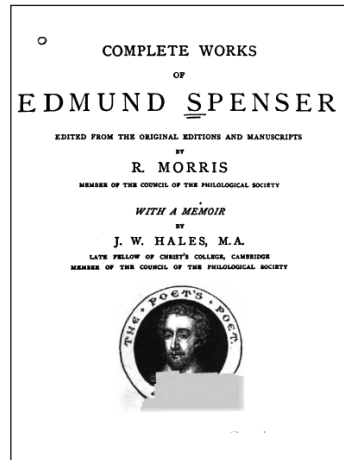


図 10 1869 年版全集 扉

本書には文人学者ヘイルズ (John. Wesley Hales 1836-1914) によるスペンサーの伝記

が付されている。そこでヘイルズは『管見』がアイルランドの惨状への深い理解を示しており、スペンサーがアイルランド人の不満に対して無感覚であったわけではないと断った上で、時代によるスペンサーの限界も指摘している。

彼は、今日ならそれをやっつてのければ名誉となるだろう懐柔策を予想することなど思いもよらなかった。彼の提案している方策は、全て強硬な抑圧策であった。それらは軍による占領に属する策であり、政治家の手腕に属するものではなかった。彼は多数の駐屯兵を置くことを求めた。彼は土着の慣習を廃止することを訴えた。実際これらの提案は当時好まれもしたのである。そしてそれ以来、何度も称賛されてきたのである。(lii)

このようにスペンサーの強硬論の限界に触れた直後、ヘイルズは、これがクロムウェルの目に留まり、スペンサーの孫ウィリアムに対する配慮につながったことを指摘している。スペンサーの『管見』とその半世紀後にクロムウェルがとった酷薄な対アイルランド策との間の関係に気づいていた点でヘイルズは確かな歴史の目を持っていたということができよう。このモリス／ヘイルズによ

る版は1893年に再版されている。

モリス編の全集以来、スペンサー作品の出版には手稿を比較しての本文校訂が通常となる。たとえば、1882-84年版全集 *The Complete Works in Verse and Prose of Edmund Spenser* グロサート (Alexander Balloch Grosart 1827-99) による十巻本 (図11)。その第9巻を占める『管見』はランベス手稿を底本とし、モリス編のものと比較されている。この全集の最大の特徴は、扉に表明されているように10人を超える学者が編集に関わっていることであり、文学作品のテキストの確定が、共同作業によって精度を増すことを示している。また、このことにより編集や注釈は、『管見』の歴史の初期に見られたような、注や伝記において編集者の個人的感情を吐露する場ではなくなった。この共同での編集方針は、のちの集注版に受け継がれることになる。

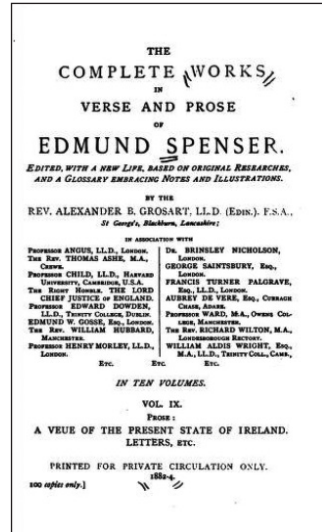


図11 1882-84年版全集 扉

1934年版全集 *The Complete Works of Edmund Spenser*. レニック (William Lindsay Renwick 1889-1970) 編集による四巻本で、第4巻所収の『管見』については手稿 R, C, D2 とウェア版のテキストを校合している。グロサートの編集とは対照的に、この版はレニック単独の編集であり、編者の個性が濃厚に現れている。末尾に付されたコメンタリーから見て取れるのは、「大詩人」スペンサーを、『管見』にまつわる悪評から擁護しようとする姿勢である。

ここでの我々の関心は、アイルランドの権利や被害でもなければ、遅まきながらの謝罪、有罪宣告、教導でもなく、一人の人間のおかれた状況と経験にある。文学研究者がそれらに惹かれるのは、その人間が偉大な詩人であるからであり、歴史研究

者がそれらに惹かれるのは、その人間の陳述が、一つの困難な時代における公的な姿勢の最良の陳述であるからである。この二つの関心は互いに排除しあうものではない。(223)

スペンサーが『管見』において強圧的なアイルランド政策を訴え、また 1580 年のアイルランド総督グレイ卿によるスメリックでの大虐殺を弁護していることは、詩人にとっての汚点と考えられてきた。レニックは、アイルランドの困難な状況、イングランド勢力の人的・物的不利を根拠に、それらは致し方のないことであったと繰り返す。

最後に、20 世紀半ばにアメリカにおけるスペンサー研究の成果として現れた集注版を挙げておきたい。1932 以来、グリーンロウ (Edwin Greenlow) を主幹とするスペンサー学者たちの手で十一巻本の集注版 (Variorum Edition) が発行され、ゴットフリード (Rudolf Gottfried) を中心として編集された『管見』はその第 10 巻『散文作品』(*Spenser's Prose Works* 1949) に収められている。近代の『管見』研究はこれでひとまず完成したといえよう。私たちが知っている新批評的な読み方も新歴史主義的な読み方も、このあとようやく始まるのである。

参考文献

- Beal, Peter, ed. *The Index of English Literary Manuscripts. 1450–1625*. 2 vols. London: Mansell, 1980.
- Bellings, Richard. "It is a book intituled 'A View of the state of Ireland'...." John Thomas Gilbert, *History of the Irish Confederation and the War in Ireland, 1641–1643*. 7 vols. Dublin: 1882–91. Vol. 1, xiv–xv.
- Brink, Jean R. "Appropriating the Author of *the Faerie Queene*.: The Attribution of the *View of the Present State of Ireland* and *A Brief Note of Ireland* to Edmund Spenser." *Soundings of Things Done: Essays in Early Modern Literature in Honor of S. K. Heninger Jr.* Eds. Peter E. Medine and Joseph Wittreich. Newark: U of Delaware P, 1997.

- Cunningham, John. *Conquest and Land in Ireland: The Transplantation to Connacht, 1649–1680. Royal Historical Society Studies in History*, n.s. Vol. 82. Woodbridge, Suffolk: Boydell & Brewer, 2011.
- Fowler, Elizabeth. “A *Veue of the Presente State of Ireland* (1596, 1633).” Chapter 17, *The Oxford Handbook of Edmund Spenser*. Ed. Richard A. McCabe. Oxford: OUP, 2010. 315–32.
- Maley, Willy. “How Milton and some contemporaries read Spenser’s *View*.” *Representing Ireland: Literature and the Origins of Conflict, 1534–1660*. Eds. Brendan Bradshaw, et al. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 191–208.
- . *Salvaging Spenser: Colonialism, Culture and Identity*. London: Macmillan, 1997.
- Milton, John. *The Complete Works of John Milton. Vol. VI: Vernacular Regicide and Republican Writings*. Eds. N. H. Keeble et al. Oxford: OUP, 2013.
- O’Flaherty, Roderic. *Ogygia, seu, Rerum Hibernicarum chronologia ex pervetustis monumentis fideliter inter se collatis eruta*. London, 1685.
- . *Ogygia, Or, A Chronological Account of Irish Events*. Trans. James Hely. 2 vols. Dublin, 1793.
- Parker, William Riley and John T. Shawcross. “Milton’s Commonplace Book: An Index and Notes.” *Milton Newsletter*. 1969; 3. 3. 41–54.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queene. By Edmund Spenser. With an exact collation of the two original editions, Published by Himself at London in Quarto.... To which are now added, A new Life of the Author, and also a Glossary....* London: J. Brindley, 1751. 3 vols.
- . *A View of the State of Ireland Written dialogue-wise betweene Eudoxus and Irenaeus By Edmund Spenser Esq. in the year 1596*, James Ware, ed., *The historie of Ireland, collected by three learned authors viz. Meredith Hanmer Doctor in Divinitie: Edmund Campion sometime fellow of St Iohns Colledge in Oxford: and Edmund Spenser Esq.* 1st pub. Dublin, 1633. Ppt. Facs. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrum Orbis Terrarum, 1971.
- . *A View of the State of Ireland. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus, by Edmund Spenser Esq; in the year 1596. The Works of that Famous English Poet. Viz. The Faery Queen, The Shepherds Calendar, The History of Ireland, &c. Whereunto is added, An Account of his Life; with other new Additions Never before in Print*. London: Henry Hills for Jonathan Edwin, 1679. 201–258.
- . *A View of the State of Ireland, Written Dialogue-wise between Eudoxus and Ireneus. The Works of Mr. Edmund Spenser in Six Volumes. With a glossary Explaining the Old*

- and Obscure Words*. Ed. John Hughes. London: Tonson, 1715. 1507–1671.
- . *A View of the State of Ireland. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Ireneus. The Works of Spenser. In six volumes. With a glossary explaining the old and obscure words. To which is prefix'd the life of the author, and an essay on allegorical poetry, by Mr. Hughes.* ... 6 Vols. London, 1750. Vol. 6, 52–219. *Eighteenth Century Collections Online*. Gale. Kyoto University. 30 Dec. 2017 <<http://find.galegroup.com/ecco/infomark.do?&source=gale&prodId=ECCO&userGroupName=kyotodai&tabID=T001&docId=CW3310164640&type=multipage&contentSet=ECCOArticles&version=1.0&docLevel=FASCIMILE>>.
- . *A View of the State of Ireland as It Was In the Reigns of queen Elizabeth, Written by Way of Dialogue between Eudoxus and Ireneus*. Dublin: Flin, 1763.
- . *A View of the State of Ireland. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus. The Works of Edmund Spenser: in Eight Volumes, with the Principal Illustrations of Various Commentators; to Which are Added, Notes, Some Account of the Life of Spenser, and a Glossarial and Other Indexes*. Ed. Henry John Todd. London: F. C. and J. Rivington, T. Payne, Cadell and Davies, and R. H. Evans, 1805. Vol. 8, 297–512.
- . *A View of the State of Ireland, Written Dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus. The Works of Spencer, Campion, Hanmer, and Marleburrough. In Two Volumes*. Ancient Irish Histories Series. Dublin: Hibernia Press, 1809. Vol. 1, 1–266.
- . *A View of the State of Ireland. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Ireneus. The Works of Edmund Spenser: With Observations on His Life and Writings. A New Edition. Complete in One Volume*. 1845. 479–530.
- . *A View of the State of Ireland. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus. The Works of Edmund Spenser. With a Selection of Notes from Various Commentators; And a Glossarial Index: to Which is Prefixed, Some Account of the Life of Spenser, by the Rev. Henry John Todd*. Ed. Henry John Todd. London: Moxon, 1850. 503–556.
- . *A View of the State of Ireland: By Edmund Spenser. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus. The Works of Edmund Spenser*. Ed. John Payne Collier. 5 vols. London: Bell and Daldy, 1862. Vol. 5, 293–496.
- . *A View of the Present State of Ireland. Discours'd by way of a Dialogue between Eudoxus and Irenaeus. Complete Works of Edmund Spenser Edited from the Original Editions and Manuscripts*. Ed. Richard Morris with a Memoir by J. W. Hales. 1869. 609–82.
- . *A View of the Present State of Ireland. 1596. Discours'd by Way of a Dialogue between Eudoxus and Irenius. The Complete Works in Verse and Prose of Edmund*

- Spense*. Ed. Alexander Balloch Grosart. 10 Vols. 1882–84. Vol. 9, 11–256.
- . *A View of the State of Ireland. Written Dialogue-wise between Eudoxus and Ireneus. MDXCV. Ireland under Elizabeth and James the First Described by Edmund Spenser, by Sir John Davies and by Fynes Moryson*. Ed. Henry Morley. London: Routledge, 1890. 33–212.
- . *A View of the Present State of Ireland by Edmund Spenser. The Complete Works of Edmund Spenser*. Ed. W. L. Renwick. 4 Vols. London: Eric Partridge, 1934. Vol. 4.
- . *A Vewe of the present state of Irelande. discoursed by way of a dialogue betweene Eudoxus and Irenius*. E. S. Eds. Rudolf Gottfried, et al. *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition*. Eds. Edwin Greenlow, et al. Vol. 10. Baltimore: John Hopkins, 1949.
- . *A View of the State of Ireland: From the First Printed Edition (1633)*. Eds. Andrew Hadfield and Willy Maley. Oxford: Blackwell, 1997.
- Swift, Jonathan. *A Short View of the State of Ireland*. Dublin: Harding, 1728–29
- Spenser Archive: Finding Aid* <http://spenserarchive.org/findingaid/>